

娘・母関係の物語（一）

山田 英美

緒言

はじめ「娘・母関係の研究」というタイトルで書き進めるつもりでいたが、「物語」と変えた事情を、まず説明しておきたい。客観的な資料と視座で叙述論文を書く気持ちがないわけではない。しかし研究を進める動機として自分自身の親子関係の問題が核にあることと、行き着きたいところもそこにあることはわかっているのである。これまでに、青年期に書いていた日記などを青年心理学研究者に資料として提供したことはある（文献1）が、自分で自身をまな板にあげたことはなかった。いやむしろ自分の深いところの問題を直視する勇氣はなかなかもてなかったし、また組上で捌いてみたとしてもそれを公表できる適当な場はそうあるものではないと思っていた。

私は発達や情緒に問題を持つ子どもの心理治療や両親面接などに

携わっているとき、あるところまでは順調に信頼関係も形成できるようになるのだが、その後の痛みを伴なった治療への踏み出しがうまくいかないことをいつも感じていた。それはとりもなおさず、治療者が自分の問題を解決していかないことに起因していると確信し反省もするのだが、なかなか山が越えられなかった。

対象が子どもの場合は、自我の力がついてくると子ども自身が問題を統合できるような人格の成長をみることができるので、子どもの発達を傍らで支えてあげるといふ、いわば教育的な役割をとることに治療目標を切り替えても、何とかしのげるものである。たとえば治療者が未解決の問題を抱えているような場合でも、そのことを自分でわかっている子どもの痛みにも共感できる場合には、子どもの自我の育ちにつき合うだけでも意義があると私は考えていた。

振り返ってみると、私が携わったほとんどの治療ケースはきつぱりとした終結を見ないまま、長い間、時には幼児期から中学生、高

校生にいたるまで毎週一定時間つきあつた。あるケースの問題症状は、私との心理治療セッションのあいだは消滅しているが、家に帰って母との間ではあいも変わらず出現し、その症状で母親を逆にコントロールするような事態にさえなつた。そうすると、両親は、「いつまでたつてもよくならない」と治療者をなじり、親の力で関係を絶とうとすることも出てきて治療中断となる。このような場合は両親を別の治療者が引き受けてカウンセリングをおこなうことが望ましく、実際そういう協力体制がとられることも多い。

また初歩の治療者は、定期的に指導者からスーパーヴィジョンを受けて常に自分の行つている心理治療をフィードバックしながら進めていくのであるが、私の場合はそれでも相変わらず子どもの成長によつて救われるということが多かつた(文献2、3、4)。

そういった事態の改善のためには、治療者自身がカウンセリング的指導を受けてわだかまりを解決し、治療されねばならない。これが「教育分析」と呼ばれるものである。心理治療に携わる人は、なるべく早い時期に教育分析を受ける必要があるといわれる。

今回、自分自身を俎上にあげるといふことを許されそうな場として、本学仏教学部紀要を選び、「娘・母関係の物語」として何回かにわたつてまとめることにした。これは私にとつて、久しい前から願つていながらその機会がもてなかつた長期にわたる「教育分析」を、一人で行ふことを試みるような意義が期待できるかもしれない、と考えるのである。

本稿の全体の構成は、三部にわけ、第一部では筆者の生育家族の中での娘・母関係を振りかえる。第二部では幾人かの著名な女性の人生軌跡を娘・母関係から辿りなおす。第三部では筆者の娘との関係を洗い出す。今のところ上記のようにまとめる予定でいる。

第一部

第一話 家族内関係線

母は三十三歳のとき三人目の子どもとして私を産んだ。以来、母がその生を終えるまで六十一年間、私は母との「娘・母関係」を経験したことになる。その私は、三十四歳のときに一人の娘を得た。今度はその娘との間で、「母・娘関係」を持ち、以来三十余年が経つた。家族内の関係はライフサイクルの立場を超えて眺めてみても当然のことながら大きく異なつてゐる。その一つは、家族の人数によるものである。娘としての私は同胞五人(女男女女男)の真ん中であり、一人娘が家族関係を結ぶ形には二本の線しかない。

一つの家族内関係線の数は、家族が一人増えるごとに飛躍的に多くなる。その数式は次のように示される。個人と家族を直接結ぶ線の数は家族の人数マイナスイナス1であるから、 $S = n(n-1) + 2$ (S : 関係線の数、 n : 家族の人数を表す)。たとえば、両親と子ども一人の場合は $S = 3$ 、 $S = 3$ であり、両親と子どもの数が五人の場合は $S = 17$ 、 $S = 21$ となる。

この数自体が子どもの成長に対して及ぼす影響はもちろん大きい。しかしそれぞれの線の太さは均一ではないし、その線が内包する関係のあり方もそれぞれ異なるということに注目することが必要である。すなわち関係が濃いか薄いか、否定的か肯定的か等によって子どもの受ける発達の問題は大きく異なってくるのである。また個々の子どもの素質やその家族を取り巻く時代や社会、文化の影響も無視できない。

一人ひとりの子どもの視座から見直した場合は、どのような文化のもとで、またその他の家族の関係線がどんな状態であろうと、母と結ぶ線は唯一無二であり、しかも太くて肯定的で安定していなければならぬ。いかなる子どもでも生来的にそれを要求するものである。このことはゆるぎない命題であるが、実際の人生行路の中でかわりあう関係的存在としての母と子は、時として迷路の中に子を見失う母と、母を求めてさまよう子とがあるのだ。

第二話 姉と母

母は、長子と末子の間に十五歳の隔たりがある五人の子どもの中では、特に長女との相性がよいように見えた。姉は私より八歳年上で、父母に喜びを持って迎えられた長子であり、彼女もそれに応える素直さと、賢さを持ち合わせていた。母にとっては申し分のない娘だった。

だが成人してからは、表立たない形ながら父親を疎んじ、私のようには反抗しなかった分、結婚相手を、父とは正反対のタイプの人だからと言つて、選んだ。姉が結婚したのは、私が中学2年生のころである。ところがその相手の男を、結婚前から母がまったく気に入らず、それは、不幸な結末に至る姉の結婚生活を予見するような暗示さえ与えかねなかった。

彼女は二人の男の子を授かったが、母が心から孫息子たちをかわいがるという態度を示したのを私は見たことがない。母は、わが娘だけが無条件にかわいいのであり、たとえ孫であっても気に入らない男の子ともというだけで気持ちの中から排除してしまっていた。半分は愛娘の血をひいているというような単純な客観理性は、母の気持ちの前ではベールがかげられ、孫息子たちには口やかましいどころかという冷たい祖母であつた。孫息子二人も何かしら心理的な問題傾向を抱えていた。

子どもがまだ小さいころに姉の連れ合いは精神を病んだ。娘の離縁をうながしたのは父であつたが、母もむしろそれを望んだのではなかったか。姉は二人の子どもをつれて実家に戻り、父の家を全面的に建てなおして両親と住んだ。彼女は結婚前から高校の教員を続けていて、一度もやめたことも休んだこともない働く女性であり、経済的には困ることはなかったし、衣類やインテリア等にも抜群のセンスを携えて生まれついたような人だった。長女としてたくさんいる弟妹のしつけなど母親代わりの役割も果たし、弟妹のだから

も敬愛されていた。

姉は、離婚してからはむしろのびのびと母と共同で家事育児一切と教師としての仕事をてきぱきとこなし、退職後に家庭でできる仕事の資格もとつて……という前向きな生活を始めていたが、いく年もたたないときに乳癌が見つかり、手術で一旦は治癒したものの、五年後に肺に再発して結局それがもとで亡くなった。まだ四十二歳の若さで、下の子どもが小学校を卒業する前だった。

姉が重篤との知らせを受けて私が駆けつけた日には、母は風邪で、病人にうつしてはいけないのでと臥せていた。もう床にも起き上がれない病状の姉は、母が寝込んだことを聞いて「わたしが変わるものだから、心配して、それで倒れたんだわ……。」とつぶやいた。その言葉で、姉と母がどんなに強く結びついていたかということに、私は改めて気づかされた。もしや姉がいなくなれば、気落ちした母がそのまま寝ついてしまうのではないかと案じられた。

第三話 私と母と姉

母は、風邪の症状が治まると身体は元気になった。が、急に老いた感じがあった。私も姉の重病でひどく動揺して退行状態になっていたのだろう、心の中に抑圧していた諸々のものが激しく沸騰し、飛び出そうとする衝動を制しきれず、ついに直接に相手にぶつけてしまった。相手とは母その人である。私たち二人は台所の流しの前

にいた。私は一気に言葉を吐いた。

「わたしは子どもときは幸せじゃなかった！たとえできたとしても二度と子どもの時期には戻りたくない。わたしなんか、真ん中でいてもいなくてもどうでもいい子だったんでしょ。」

母は愛する長女と別れなければならない後は、次に同盟を結ぼうと思っていたかもしれない次女から、「あなたは悪い母親だった、あなたのせいであたしは……」と言わんばかりの激しい口調の挑戦状を唐突につきつけられた気がしたので、一瞬混乱したかに見えしたが、気丈に、だがいささか悲しそうに、

「○○ちゃん（長女）はそんなこと言うたことがない。わたしはうまくやれた！」と言り返した。そして「……あなたは……真ん中だから一番だいじだよ。」と付け足したが、後のほうは言葉尻をとらえた理屈にすぎない軽さがあり、私の心にはまったく響いてこなかった。娘のひとりが「幸せではなかった」という思いをぶつけた。その内容の複雑さを丸ごと受け止めるだけの余裕はそのときの母になかったのは無理からぬことなのだが、何も言わずに抱き寄せてくれたとしたら、たとえ私の思いが少しも理解されていなかったとしても私は即座に充たされ、母との歩み寄りもつと速やかにできたかもしれないのだった。だがやはり、母は十分甘えさせてくれず、私は甘えられない子どものままに押しやられた気がした。

しかし、時代背景やさまざまなことが絡み合う中で一人ひとりが精一杯生きてきたのだから誰のせいというわけでもないことはわか

つていながら、母その人に抑圧感情をストレートにぶつけることができたことが、私をある程度解放してくれた。長女のなきがらの傍らで震えている母の小さくなった肩を、抱きかかえてあげることができたのだから。

そして、「わたしら（長女と）はうまくやれた」という母の言葉で、姉のために私はむしろ安堵する余裕も得ていた。母親に愛された娘の生涯は、短くても根本的には不幸せではなかったにちがいないと思えたからである。三女のたまたま気が利かない行動をあげづらい、「あの子はアホや。」というような言葉を吐いてはばからない母も、長女には全面的に心をゆるし、結婚の失敗すら、彼女を微塵も批判することはなかった。姉もまた母を素直に愛することができた人だった。その関係の線は太くゆるぎなく、排他的なほど相互へのやさしさにあふれていた。しかしいわゆるべつたりではなく適度の距離をとることができたのは、姉の節度ある性格によるものだった。苦しさの極限にいながら、一つひとつのちよつとしたことにも「ありがとう。」と礼を言う姉を見て、「お礼なんか言わなくて、もつとわがままでもいいのに……」と、私は幾度涙したかしのれない。

第四話 姉と私と水辺のできごと

姉との思い出は、私の一番古い記憶の中に鮮明である。その情景は、友人との水浴びに連れていってくれた兵庫県の丹波篠山の山間

に流れる川べりである。四歳だった私は母が手編みでこしらえた水着を着せられていた。ロンパースのような形で股下をホックで止めるようになったものである。姉は、

「ここを動いちゃだめよ、ここで遊んでいるのよ。」と言いきかせて、友だちと楽しそうな声を上げながら水しぶぎとともに川の中へ動いていった。姉の姿を追うちよつと不安げなまなざしは、すぐ足元の透きとおった水と小さな石ころに向けられ、幼児はしゃがんで石ころ遊びに夢中になった。

しばらくたって、川原の向こうから小学校中学年くらいの男の子たち四、五人がふざけあいながらやってくるので、びっくりして立ち上がってそつちを眺めた。幼児は不意の環境の変化に少なからぬ恐怖を抱くものである。男の子たちはなおも近づいて、立ち止まり、幼児のほうを見つめて指さして一人、二人が笑い転げ、また他の子も次々と卑猥そうな笑いとともに執拗に幼児の一点を指さす。幼児はわけがわからず彼らが指さすほうを見ると、立ち上がった拍子に水着のホックが水の重みではずれ、下腹から下が丸見えになっていることがわかった。反射的に水にしゃがむも、辱しめられたことがわかって、幼児は大声で泣くよりほかなかった。泣き声を聞きつけて姉が急いでやってきたときには、男の子たちは知らんぷりをしてもう川下のほうへ歩いていくところだった。姉はすぐ事情を察したらしく、だまって妹のロンパース水着をなおし、手を引いて川の向こう岸へ連れて行こうとした。ぐんぐん引っぱられた拍子に鼻

に川水が入り、痛くてこわくて幼児はまた泣いた。しばらく対岸の木の下で震えながら、姉が帰ろうと言うのを待っていた。

家に帰ってから、姉は母に「糸で編んだ水着を止めるのは、ホックじゃなくてボタンがけにしないと。」というような進言をしていたことも、幼い者の記憶の引出しにしまわれた。そのとき、母はうつむいて何か手仕事をしていて、十二歳の姉娘から報告を受けたことをあまり重大には考えなかったのだろう、「ふん。」というような生返事を姉に返しただけで、幼児が窮状に陥ったことに対する詫びとかなぐさめの言葉はなかった。

玉谷直美は、『女性の心の成熟』の中で「母親は、子どもの感情の流れをスムーズに導いてうけとめる海のような器たらねばならぬ」という意味のことを述べている（文献5）。幼い者の恐怖や羞恥や悲しみを姉はわかってくれたが、母は器を差し出して受けてはくれなかった。性格にもよるが、そういうたわだかまりは、子どものあるところの中のためにたまることがあるのだ。

ずっとずっと後年になって、臨床心理学者の河合隼雄先生と歓談していたとき、同郷育ちということで私はふと、このもつとも古い記憶のことを話題にした。河合先生は私より十歳年長で、当時、悪童たちの年齢に近かったかと思う。

「その中に先生もいませんでしたか？」と冗談で言ったつもりが、先生は非常にまじめに、関西訛りで

「そりゃ、ほんまに、すみませんでした。」と、頭を下げて深く

謝られたのである。

私はこのときほど、心理療法師の真髄に触れたことがなかった。もちろん、その悪童たちの中に隼雄少年が混じっていた確率は低い。それでも、同年代の男の子たちがやりがちなことと、一人の幼女に与えた打撃について深く察し、代わりに詫びられたのである。上記の玉谷直美が「女性にとつて男性は母ともなりうるし、逆の場合ももちろんありうる」と述べるように、先生はこの場合、少年たちの代わりであるばかりでなく母の代わりでもあったことは明白である。何十年経つても、なかなか塞がらなかった小さな傷の一つに、その一言と態度が、母が懐から出してくる不思議な特効薬のようにやさしく塗られるのを感じたからである。

第五話 私と母と妹とニッキ（肉桂）の束

戦火が断末魔の激しさを呈したころ、私は父方の伯父の家に預けられてその田舎の小学校に通うことになった。母は五人目の子を宿していたこともあり、私がんばり屋で大丈夫と思つたのかもしれない。四歳の三女を手元において、六歳の娘を親戚の家に託したのだ。後で三歳ちがいの兄も加わつたが、初めのうちはひとりぼっちだった。母が恋しくて恋しくて、ところかまわず、覚えてたの平がなで「おかあちゃん むかえにきて はよ（早く）きて」と毎日書き散らし、紙切れに書いて、かまどの火をかき混ぜている黒い蜘蛛

蛛を連想させる伯母に、母へ送ってほしいと頼んだ。伯母は「はいよ」と割烹着のポケットにしまったが、きつとその悲痛な叫びをつづつたみずばらしい紙切れは、後で躊躇なくかまどにくべられたに違いない。不気味なほど腰が曲がり暗い生活の影を背負った伯母が、親戚の子どもの心を尊重して面倒な仕事―封筒に入れて宛名を書いて切手を貼って投函するようなことをしてくれる可能性などとても低いことは、子ども心にもうすうすわかつていた。それでも頼まないではおれなかった。

一抹の後ろめたさのためか伯母は、やつと母が来た日、
「〇ちゃんが、待ち焦がれて、待ち焦がれてな。」と、わざわざ離れのほうにそれだけを言いに来た。

母は妹を連れて突然あらわれたのだった。そしてみやげに小型の薪の束のように縛ったニツキ木を二つ、私の目前に差し出して
「どっちがよい？」と、選ばせてくれた。よい香りがするそんなしやれたおやつなどというものは、伯父の家に来て以来口にしたことがなかった。私は目を皿のようにして二つの束の大小を見比べ、
まず

「こっち。」と指した。母が快くそれを私に渡し、もう一方を妹に。妹がうれしそうにその束を手にした途端、そちらのほうが良いような気がして、

「やつぱり、そっち。」と交換を要求した。妹は、おとなしくなされるままニツキを手放し、母がとりかえたら、

「やつぱり、そっち。」三たび「やつぱり……。」と私。

「もうー」と、ついに母があきれて、

「どっちもおんなじなんやからー」と、苛立った声で言う。

妹は大好きな母とずつといっしょにいたではないか。その妹に「同じもの」が与えられる不条理を感じて、私は、言葉にできない羨望と怒りとでぐしゃぐしゃになっていたのだ。同時に、「わたしに選ばせてくれたのに、あんなに待ち望んだ母を怒らせて、わたしは……」という罪悪感と、言うにいわれぬ哀しみに打ちのめされていた。顛末はよくは憶えていないが、なんだかしまいにはその大切なニツキの束をほうり投げて、座りこんで泣いたという気がする。

大人は往々にして、子どもが真にほしがっているものは何かというところを見まがうことがある。しっかりとした子だと大人が過剰期待するときには、なおさら落とし穴が見えない。ひとりでもよく我慢していた娘をいたわるためには、母が「あなたには特別に。」と妹よりも一、二本多くこっそりニツキをおまけしてくれるとか、さびしかったでしょうにと、しっかりと抱きしめてくれるとか、そういう母の配慮がほしかったのだ、と後年心理学を学ぶようになって明確にわかったのだ。

(続)

参照および引用文献

- 1 山田良一著「青春の軌跡—自己確立への道」大日本図書 1981
- 2 山田英美著「E.E.症状をもつ幼児に対する心理治療日誌(1)」
山梨大学教育学部研究報告 第29号 168—163頁 1978
- 3 同右 「E.E.症状をもつ幼児に対する心理治療日誌(2)」
山梨大学教育学部研究報告 第38号 111—121頁 1987
- 4 同右 「E.E.症状をもつ幼児に対する心理治療日誌(3)」
山梨大学教育学部研究報告 第39号 208—215頁 1988
- 5 玉谷直美著「女性の心の成熟」創元社 97—102頁 1985

【キーワード】

娘・母関係

教育分析

家族内関係の線